

## 研究を現場にどう活かすか？ - 戦術の検討から -

高橋 仁大（鹿屋体育大学）

## 研究の前提

対象は男子大学テニス選手である。技術的には、ある程度の基本はできており、ダブルスにおいてはサーブ&ボレーを用いる。また、指導者の話を理論的に理解する能力がある。

## 1. ダブルスのゲーム様相は？

ポイントをつけてみよう！

	技術		結果		カウント	その他	
	サーブ	S	サーバー	x		ポーチ	P
	リターン	R				フォーメーション	F
	その他	A					
1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							
8							
9							
10							
合計	S					P	
	R		x			F	
	A						

## 2. 実際のゲームの様相は？

サービスとリターンで終わったポイントは何ポイント？

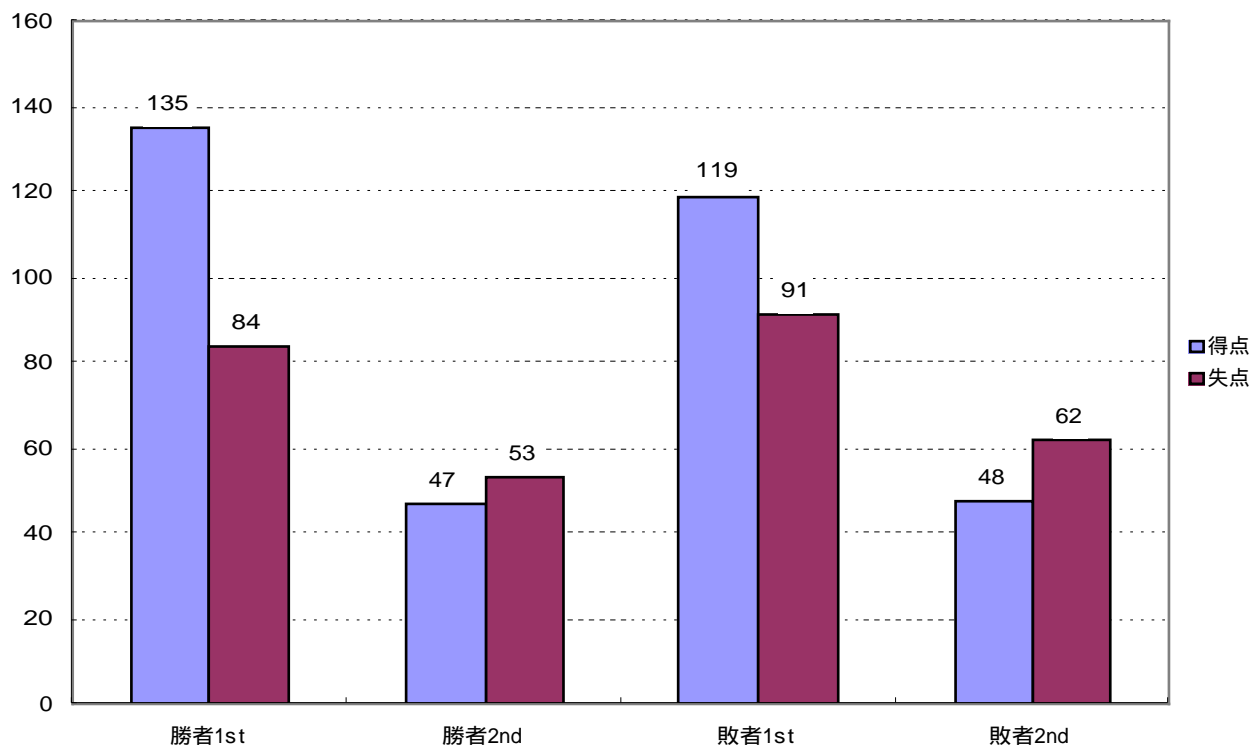


図1 サービス別の得失点数（九州学生男子ダブルスより）

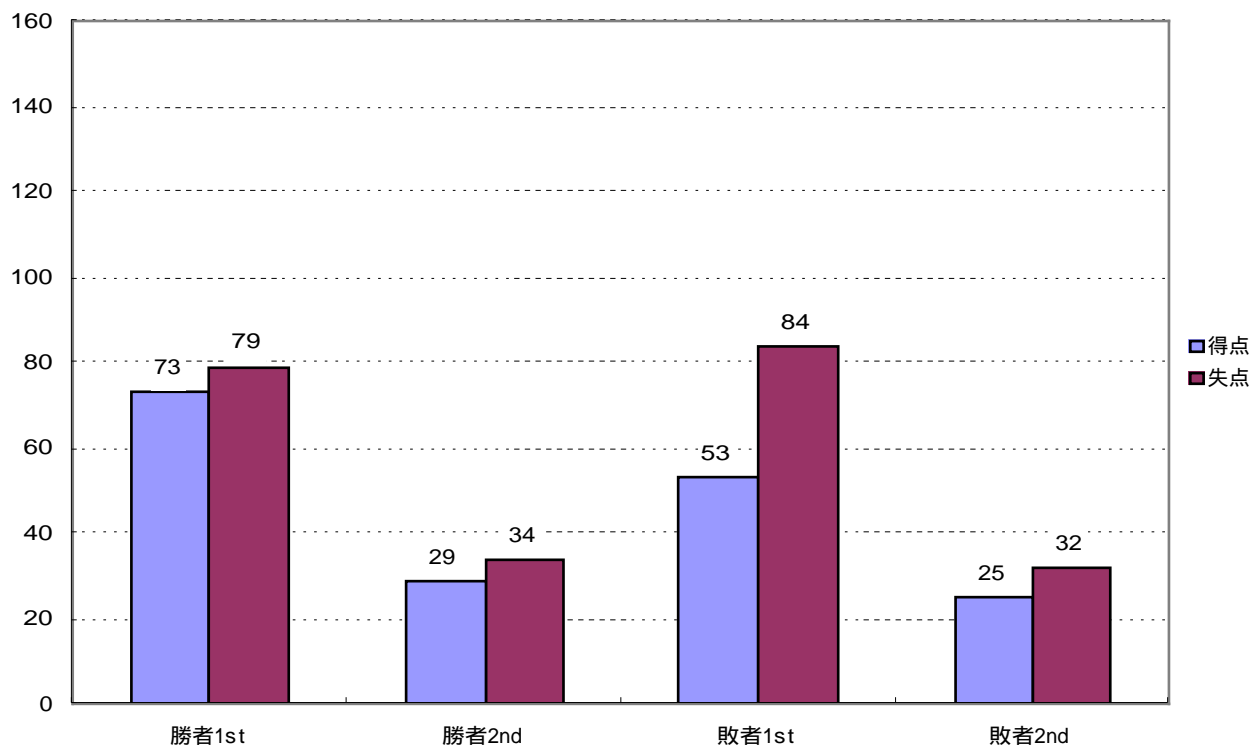


図2 プレーオン時のサービス別得失点数（九州学生男子ダブルスより）

### 3 . 世界最先端のゲームの様相

上記のように、サービスとリターンが重要である。

そこで・・・

サービス側	1stでポイントを 獲得する		相手のリターンミス を引き出す		フォーメーション
リターン側	プレーオン時は ポイント獲得率 が高くなる		リターンミスを減ら したい		ポーチ

#### ( 1 ) フォーメーションについて

- ・ i フォーメーション
- ・ Deフォーメーション
- ・

#### ( 2 ) ポーチについて

- ・ 3 球目のポーチ
- ・ 4 球目のポーチ
- ・ ゲーム終盤のポーチ
- ・

### 4 . 現場への活用

- ・ まず「知る」ことが大事

鹿屋体育大学での実践：これまでの総合的練習

テーマを定めた重点的練習 + 選手への課題の意識

- ・ 試合場面で「見抜く」ことができるか？ 経験？・・・これを「知識」で補う  
「自分が3年かかったことを1年で、5年かかったことを2年で、7年かかったことを3年で学生たち  
に吸収させる」（渋谷、2000）